―連載小説―

クワンティエンの夢

多谷昇太

（十）この道やゆく人なしに秋の暮れ

♫　讃岐の松山に松の一本ゆがみたる、もぢりさのすぢりさに、猜（そね）うだるとかや、直島のさばかんの松をだにも直さざるらん　♫

讃岐に遠流された崇徳上皇をからかって当時の民衆が歌ったとされる今様（今で云う歌謡曲？）の歌詞が梁塵秘抄に残っている。選者がもし後白河だったとすればはたしてどんな意趣もてそれを為したのだろうか。この上皇は思わぬ形で即位するまでは言葉は悪いがいわば「うつけの君」とでも評されるような世事に疎い面があったとされる。源氏物語内の八宮とはまったく異種の意味合いにおいてであるが。すなわち即位するなど自分には無理なことと始めからあきらめて、今様などにうつつをぬかしていたのを、棚ボタで機がめぐってくるとまるで人が変わったかのように権力指向となり、源頼朝から「三界一の天狗め」と揶揄されるほどに長期間皇位に君臨し続けたとされる。覇者となった平清盛→木曽義仲→源義経→源頼朝と順にあやつったとされる面を捉えて、世間からもそのように評されるのだろう。遠流されてもはや無害となったと思われる崇徳を、刺客を向けてまで葬ったのがもし事実とすると、ちょっとこれは度が超えていよう。みずからの幼少時には年の離れた弟として可愛がってもらったその崇徳を、である。しかし、これら歴史に記された、あるいは人々に語り継がれた事どもをそのまま鵜呑みにするのもどうかと思われる。「歴史は勝者がつくる」のであり「都合の悪いことは隠す、変えてしまう」のである。例えばはるか時代の下った大塩平八郎の乱にしても、そのような乱に至らしめた当時幕府の圧政があったがゆえともされるのだ。

新聞報道とか今に残った史実とかは多分にカナールとカナルディエなのであり、勝者がつくったそれであるということを否定できないということである。崇徳の怨霊化にしても当時と後代の人々が造り上げたプロフィールとも取られ、舌を噛み切って血書を認めたとかはまったくの事実無根であると

する説が根強くあるのだ。拙くはあるが歌人としての作者の目からしても崇徳上皇の御歌を拝見するにつけて、上皇の穏やかなお人柄を感得するばかりである。怨霊などとはこれも後代の忠臣蔵同様、さもあれかしという人々の恣意が働いた結果というのがむしろ事実なのではないか。怨霊などとおどろおどろしくあるのはむしろ、皇位とつらなる権力と富をめぐっての、輩（うから）どもが為した行為、その罪の意識がそうあらしめたのだろう。崇徳、後白河、引いてはこの物語の主人公である待賢門院（しかし正確に云えば主人公は待賢門院・亜希子のみではなく、‘関わり’というのが作者の主意なのだ。六道輪廻に翻弄される人々の、しかし三世を掛けたそこからの離脱、ということをこそ私は描きたいのである）ともども、心ならずもそのような史実とされるカナールに則って描いてはいるが、それは飽くまでもクワンティエンの追求に於いてそれを「お借りした」というのが私における事実なのである。作者の良心として歴史上の方々にお断り申し上げたい。ただし、である。例え崇徳上皇が怨霊などとは無縁のお人柄だったとしても、当時も、後世に於いても、このように誤解されて祭り上げられ続けるならば、さぞや心穏やかならずなのではないだろうか。しかしそれならば語るに落ちるで「お前もだろう」となるのだが、そこはクワンティエン追求の指向のもとに「異なり」を強く申し上げたい。方々に於いてはどうかこの先を御覧じませと合わせて申し上げるしかない。しかしそれははたやはた、いかにも得手勝手、不遜過ぎるだろうか…。

「ああ、いいわよ。説法でもレクチャーでもしてみせるわよ」とあたかもヤクザの口上然として梅子が凄む。おさえることができないほどの理不尽さへの怒り、とでもいうものが梅子にはあるようだ。

「私はさあ、クワンティエンの逸話などといういわば世迷言に、昇華させるあんたの指向がそもそも気に入らないのよ。イワシの頭も信心からで、信仰さえしていれば徳になるとでも云うの？事実・真実から目をそむけて南無、南無とでも云ってればそれで済むわけ。その女性兵士がサルから逃げていたというのも、サルにやらせるのが人倫にそむくのもあるだろうけど、他のものから逃げていたのだと思うわ」

「他というと？」と鳥羽が訊く。梅子の見せるくやしさにどこか心打たれた感がある。

「下らなさよ」吐き捨てるように梅子は云って更に「こんな茶半で馬鹿馬鹿しい社会やその極みのような戦争から身を引きたかったのだと思うわ。だってそうでしょ、ベトナム戦争自体が自由対共産のイデオロギー対立ではなくて、事実はアメリカの覇権を守ることだった。対する北ベトナムにしたって戦後の、あのザマはいったい何よ。みずからが奉じた共産主義もアメリカへの遺恨もみんな綺麗に投げ打って、経済指向の欲望社会と化し、アメリカの資本や企業にアイ・ラブ・ユーでは死んで行った兵士たちが浮かばれないわ。そしてそれは日本も同じよ。自分のような女性まで戦争に狩り出させる、その社会のもろもろの、すべてが嫌だったの。ＮＯ！を云ったのよ」とまで一気に云って一息入れようとしたが「おサルさんが示した愛情に心引かれたんだと思いますけどね」と亜希子が小声で云うと火に油をそそぐ結果となってしまった。梅子に休みはなしだ。

「そ、その愛情がくせものなのよ。じゃ、じゃあその愛情を受け入れておサルさんにやらせるのかさあ。異目異科での性交など許されない。倫理にもとるし科学的にもマッドだ。しかしそのタブーのようなことが世間一般では通用していると云っているのよ。近親相姦でも一夫多妻でもなんでもありで、それが権力者や覇者ならばすべてが許される、咎められることはないの。サルの愛情はだからそういった矛盾も含んでいるのよ。それが自分を斯く死に至らしめた、すればそれを決して受け入れるわけがないじゃないの！」

「そうでっか？しかし近親相姦や獣姦が世間で認められ、通用してますかいな」苦笑しながら鳥羽が異を唱える。『無茶苦茶云うとる』とばかり梅子を買い被ったことを自嘲している観がある。しかし「ふむ、おもしろい。しかしそれ（サルの愛情）が純愛だったという気もしますが…とにかく、ひと息お入れなさい、梅子さん」と僧が休息をすすめる。

しかし荒ぶる神はおさまらない。

「ンなわけないじゃん！じゃあさっきあんたが鳥羽に、い、いや、鳥羽さんに云ったあの古語はなによ。’いにしえ、幾多の男、女（おうな）を得給いて、生憎（あやにく）だち給いしを…’なんて云っちゃってさ。まるでいにしえの帝王の不節操を咎めているように聞こえたわよ。認めてないんでしょ？それを。にも拘らず愛という言葉にすべてを許容させるなら、それは信仰もだけどさ、サルの愛情もイ

ワシの頭も、みんななんでもオッケーということになっちゃうじゃない。だからあんたの説法は矛盾しているのよ」「梅子さん、お茶」と加代が進める。

誰のお茶だかカップだか、確かめることもなく一気に飲み干してから、なおも挑むように梅子は僧を見つめる。「わかった、わかった」と云って亜希子は梅子を止めたいのだが、そうすれば逆に再燃するに決まっているので無言のままでいる。僧も穏やかにうなずくだけで無言のままでいる。たたらを踏んだ梅子がいまさらのように「誰のお茶？これ」と加代に聞く。「梅子さんのです」「あ、そう…」と話の矛先を失ってばつの悪そうな梅子。そのままほっとけばいいのだが郁子が「もう止しましょう、梅子さん。サル、サルってお下品ですし…」「しっ」とばかり指を立てて亜希子が止めたが「きっとその女性兵士はおサルさんがこわかったんですよ。戦争のために人間らしい感情を失っている自分を、そのう…諭されるようで、それが堪えられなかったのでしょう」と云ってしまう。そのあたりが正解と皆も暗黙の了を示したようだが、ところがそれが梅子の急所を衝いたらしい。「梅子、もういい…ああ、もう…」

遅かった。いままでがカミナリのドロドロドロだっとするとついにピカッ、ガラガラガラと来てしまったのだった。

（続く）

落ちたーっ！！！（Pixabay より借用）